

大通公園を望む窓辺から

AIは医療を変えるか

会長 長瀬 清

最近あらゆる分野でのAI、ICT、IoTの利活用は目覚ましいものがあります。その中でも、囲碁、将棋の世界でのAIの急速の進歩が脚光を浴びています。中学生プロ将棋棋士 藤井聡太四段の快挙には、日本国中が沸きました。藤井プロも小さい頃からコンピューターのソフトを相手に腕を磨いてきたといいます。昨年から今年にかけては破竹の29連勝、勝率、勝利数、対局数の最年少四冠達成。朝日杯将棋オープン戦で優勝。また、詰将棋解答選手権で優勝しました。100点満点で4連覇でした。名人戦・順位戦C級2組を10勝負けなしで突破、六段に昇段しました。

AIとプロ棋士との対戦はいずれもAIが勝ちを制しています。

竜王戦の予選で藤井六段は佐々木勇五段と対戦しましたが、その将棋をAIと対戦させてみると、藤井六段の着手がAIでは対応できず、その時点で恐らくAIは負けであったろうというAI将棋制作者の解説がありました。AIには数え切れないほどの実践の棋譜が蓄えられています。人間の記憶力がそれに匹敵するのか、また瞬時にその中から適切な手を考え出し反応ができるものか、わかりません。

医療においてもAIの活用が進んでおり、将来、医師不要ということはないでしょうが、医師の果たす役割が変わってくるかもしれません。診断や治療法の選択では大いに力を発揮するでしょう。誤診が少なくなるかもしれません。ダヴィンチのようなロボットマシーンがどんどん開発され、医学の知識さえあれば誰でも安全に操作でき、外科医、内科医の区別がなくなることも考えられます。これから数十年後の医療の世界がどうなっているか、興味津々です。AI全盛の 때가意外に早く来るかもしれません。

雑感

理事 松家 治道

日本医療安全調査機構は、2017年に「院内調査が必要」として届け出があったのは370件、医療事故調査制度が始まった2015年10月以降、届け出の累計は857件と発表しました。機構は、年間の届け出件数1,000～2,000件の想定を大きく下回っており「制度がまだ定着していない。今後も、医療機関への研修などで周知を続けていきたい」としています。

しかし10月8日付の読売新聞の記事「無痛分娩死、急変時処置『蘇生に有効と云えず』」を見てみますと、増えないのも当然と思われれます。妊婦が死亡した事例について、医療事故調査委員会の報告書を入手したとして、この中の「人工呼吸が優先されるべきだった」などの文言を紹介し「医学的見地からもミスが裏付けられた」と書いています。

記事では、報告書の内容が責任追及の根拠になっており、実名を出して医師の責任を指摘しています。今回この記事を受けて、本年3月の日医代議員会において、札幌市医師会の今副会長が①院内事故調査報告書が医療訴訟等の証拠として目的外使用されることについて②非懲罰性、秘匿性、独立性を担保した「医療事故調査報告書のガイドライン若しくはマニュアル」などの作成を行う必要性について質問をしました。

しかし①については渡してしまった報告書はどう利用されても仕方がないと、制度作成に関わった方の答弁としては無責任なものでした。ただ②についてはその必要性を認め、日医作成の『研修ワークブック 院内調査の進め方』には、「診療行為の妥当性の評価に傾くことなく」という点に重点を置いた内容を盛り込む予定だということでしたので少し救われました。

この医療事故調査制度による報告書は、当事者の患者さんまたは家族の方に説明するためのものではなく、未来の患者さんのためであり、個人の責任を追及するものではないことを今一度確認する必要があると思われれます。

